

たりする。「ムサシ」は見知らぬ人々が人里離れた場所に集まり、オムニバス形式で進んでいくというデカメロン・スタイルを取っている。これらの物語は多種多様で、最初は、注意深く練り上げられた物語ではなく、リアルタイムで起きている本当の出来事のように思える。

これを言ってもネタばれになれないと思うので書くが、「ムサシ」の主人公である2人のサムライ以外の登場人物は全員、自分たちが創り上げた芝居の役を演じている俳優たちなのだ。終盤で1人の役者が「あなたがた観客がどんなに芝居を愛しているか知っている」と言う。彼らは実に独創的で芸達者な俳優たちである。

例えば、まいは1幕で（乙女と共に）、漁師に残忍に殺されたタコの亡霊の唄を面白おかしく演じる。そして2幕の、自分の若かりし頃のふしだらな行為と、生き別れた赤ん坊についてメロドラマ風に赤裸々に告白する場面では1幕の時と勝るとも劣らない素晴らしい演技を見せている。終始、日本の政治構造と兵法を分析し続けている宗徳も、復讐心に燃える子タヌキの顛末についての能を披露する場面がある。

沢庵宗彭と平心の説法は突拍子もない方向にズレたりする。「ムサシ」では使い古された、つまらない展開は一切ない。（この上なく楽しい）ラインダンスや、きき茶の遺恨の仕返しに向かう兵士たちの襲撃（中通路を使用するので、観客は足元に注意）によって会話が中断されることもある。

一見、特に意味がないように演じられているこれらの場面にも、実は意味がある。劇の最後になってようやく「ムサシ」に散りばめられた全ての要素が、意味のあるものだったと判明するように創られている。伝統的な能舞台、日本の版画、生き生きとした息づく自然を連想させるセット（照明の勝柴次朗と音響の井上正弘が、巧妙に中越司がデザインしたセットを際立たせている）にも同じことが言える。

劇中の数多くの魅力的な場面を引き立てているのは、役者の台詞に反応するようにお辞儀をしたり溜息をつく竹林。劇の冒頭、この竹林は自分たちが表現しようとしている独特の世界へ観客をいざなうように前に進み出てくる。その誘いを断ることは出来ない。